

「3・11いわて教会ネットワーク」ニュース

Vol.3 2011年4月17日

被災地支援活動ニュース

宮古に拠点ができました

宮古市のある旅館を、今後の支援活動の拠点として用いさせていただくことになりました。そもそものきっかけは、支援チームが偶然にもその旅館の片付け作業を実施したことにあります。その後、旅館側のご厚意により、三階の客室の使用が可能になりました。

さらにアメリカからの EMS(エマージェンシ・ミニストリー・サービス)チームが資材調達の上、旅館一階部分の修理・修復を実施。一方、千葉からの IBF(インターナショナル・バイブル・フェローシップ)チームは泥の掻き出しや清掃作業を行い、旅館の整備が進みました。早速、ホクミン(北海道クリスチャン・ミッション・ネットワーク)、同盟基督教団、聖契キリスト教団、青森ジョイフルチャペル、OMF、ぶどうの樹キリスト教会等のチームがここを拠点として、被災地での支援活動に当たって下さっています。

この一週間程の間に被災地で実施された主な支援活動は以下のものです。

- ・ 久慈・野田地域への物資搬入(ホクミン)
- ・ 田老地区総合事務所における炊き出し(ホクミン、同盟基督教団)
- ・ 大船渡聖書バプテスト教会の復旧工事(北上聖書バプテスト教会、OMF、ワールドビジョン)
- ・ 大船渡への自転車配達(聖契キリスト教団)
- ・ 大槌への救援物資配達と手伝い(ホクミン、同盟基督教団)
- ・ 被災地から雫石町に避難している方々への物資援助(盛岡チャペル)
- ・ 被災地の方々を温泉に招待し、お世話する温泉プロジェクト(北上聖書バプテスト教会)
- ・ 奥州市内に避難している方々への物資援助(水沢聖書バプテスト教会)

「子どもと遊び隊」の派遣

盛岡聖書バプテスト教会、宮古コミュニティチャーチのチームを主体とした「子どもと遊び隊」が避難所である宮古小学校とグリーンピア田老に定期的に派遣されています(裏面記事参照)。子どもたちの中には乱暴なスキンシップを求める子どもたち、情緒不安定な子どもたちも多く見られるとのこと。幸い、定期的に関わり続ける中で子どもたちや地元の方々との信頼関係が築かれつつあります。子どもたちのケアと働きの継続のために今後ともお祈り下さい。

他地区ネットワークとの連携

仙台地区で立ち上げられた「仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク」との連携が現在、進んでいます。一方、青森では「3・11 あおもり教会ネットワーク」が立ち上げられました。岩手の働きを後方から支えて下さることになっています。被災地全体において、支援の輪が広がっています。

被災地支援活動報告

4月7日(木) 宮古

継続的な支援を続ける中で開かれて来た扉がある。避難所となっている1つの小学校で週に2回訪れて行く「子どもと遊び隊」。当初、一体何の集団か、と警戒されていた節があるが、通い続ける中で顔も覚えられ、信頼して頂けたか、担当の方の対応がだいぶ、いや、まるで変わって来た。

「ええと、どういう団体で？ ……来る前には必ず連絡して下さい。」(最初期) → 「この日に来て頂けると助かります。」(先週) → 「いつでも来て下さい。」(昨日)

子供達とも、次はこの日に来るね！と約束して避難所を後にする。昨日は、駆けつけて下さった、ホクミン(北海道クリスチャン宣教ネットワーク)チームから二人のメンバーも合流。盛岡から連続して参加の隊員達も、往復4時間の距離の壁にもどかしさを覚えつつも、子供達の名前を覚え、祈りも深められている模様。今後、この「遊び隊」は、建てられていく仮設住宅の地域での働きにも広がって行くだらう。被災地での活動において「築かれる信頼関係の中での地道な継続支援」、既にこれが一つの鍵となって来ているように思う。

(近藤愛哉)

4月11日(月) 大船渡

今日は北上聖書バプテスト教会チームが大船渡聖書バプテスト教会の復旧工事を行っているOMFチームに協力するかたちで作業にあたりました。すでに電気と水道は復旧し、OMFチームが調達してきた流し台や冷蔵庫も設置されていました。また壊れてしまった物置の替わりも、ホームセンターの展示品を安く調達してきてくれて、すでにしっかり設置されていました。心配されていた下水も復旧しているということで、晴れてトイレも使えるようになりました。

明日12日以降、ワールド・ビジョンのチームが応援に入り、ドアの取り付けや残された内装工事が行われます。OMFチームは金曜日までの滞在となるそうです。OMFチームはこれまでの作業で近所のお手伝いをしたことが縁で、教会近くの英語教室をなさっていたお宅の2階を宿泊場所として提供して頂いています。なかなか良い関係ができつつあります。大船渡での支援活動は、教会の復旧によって、ようやく本格的にスタートできる可能性が出て来ます。

(佐々木真輝)

支援する側と、支援される側と

若井 和生

被災地には多大な助けが必要とされています。その被災地のために何かしたいと願われる多くの方々がおられることは本当に感謝なことです。ところが両者の思いがなかなかうまく噛み合わないという問題が今、発生しているようです。

支援される側には、受け入れの状態が十分に整えられていないという課題があります。一方で支援する側にもご配慮を求めたいと思っております。被災地に立つ教会は、ただでさえ疲れ、多くの負担を担わされています。被災地の教会への直接の連絡、介入、物資運搬等はなるべくお控え下されればと思います。

支援する側の思いを十分に受け止め、調整し、それを被災地になるべく適切なかたちで届けるために、私たちはこのネットワークを立ち上げました。今後とも皆様のご支援とご理解を宜しくお願い致します。